



紙譜同答 卷之三

自譜を論之下

森行六



一前ふりて近年に集ふる亦葉傳文のお遠なる
と歎くといふるも他の撰集ふるは同國の
英菊の香素良乃云梅の道の加賀紙の枝葉の
抄是れ宛中云梅の集ふる亦亦るその下はあ
る亦亦る如きひ宛字傳文は事乃お遠と
二十余言下巻より十七七もあはるしこ
吟味せしめ何有くあらんも志れ也

一 其不疑一 竹之高身先生此あやまらと云ふか
 何と集也 風圃の去来先生の引也一あは波友をみれ
 人一此ふ集作ら時先生内見^{まいたん}たり事とあるはし
 也^{さう}集せりまの初蟬より^{せん}難して云く作者れあや
 備りの^{あやま}誤りありてあやほりよあは^{あやま}誤り撰者の誤り
 也^あ之中に撰者乃句れよあ^あ集まをいまはれはくあ
 こそ一や見^{いん}流一とらく^{いん}い^{いん}た^{いん}流^{いん}の集みと
 里^{いん}の^{いん}顔^{いん}塞^{いん}多^{いん}も^{いん}独^{いん}筆^{いん}れ^{いん}書^{いん}と^{いん}違^{いん}ひ^{いん}り^{いん}の^{いん}お^{いん}透^{いん}あ^{いん}と
 み^{いん}ん^{いん}ま^{いん}し^{いん}と^{いん}は^{いん}あ^{いん}れ^{いん}は^{いん}ま^{いん}り^{いん}り^{いん}先^{いん}生^{いん}れ^{いん}撰^{いん}た^{いん}ま^{いん}あ
 あり^{いん}と^{いん}也^{いん}も^{いん}み^{いん}れ^{いん}二^{いん}集^{いん}り^{いん}も^{いん}れ^{いん}乃^{いん}と^{いん}ち^{いん}が^{いん}新^{いん}と^{いん}ん^{いん}

事を法にて不圖不志氣を具あやまらうとてあはれ
 あやほりふ何れに

一初蟬れ書と^{いん}の^{いん}鳴^{いん}也^{いん}書^{いん}の^{いん}い^{いん}れ^{いん}を^{いん} 大^{いん}洋^{いん} 香^{いん}
 は向うま^{いん}の^{いん}鳴^{いん}也^{いん}切^{いん}り^{いん}又^{いん}音^{いん}も^{いん}あ^{いん}り^{いん}あ^{いん}れ^{いん}は^{いん}
 こ^{いん}や^{いん}あ^{いん}れ^{いん}蟬^{いん}の^{いん}音^{いん}も^{いん}ひ^{いん}れ^{いん}い^{いん}り^{いん}あ^{いん}り^{いん}ん^{いん}は
 知^{いん}れた^{いん}事^{いん}を^{いん}し^{いん}其^{いん}希^{いん}に^{いん}見^{いん}や^{いん}り^{いん}て^{いん}捨^{いん}る^{いん}さ^{いん}れ^{いん}字
 又^{いん}の^{いん}北^{いん}の^{いん}説^{いん}句^{いん}の^{いん}得^{いん}の^{いん}説^{いん}作者^{いん}希^{いん}撰^{いん}者^{いん}同^{いん}然^{いん}と^{いん}見^{いん}ん
 た^{いん}と^{いん}は^{いん}れ^{いん}て^{いん}も^{いん}あ^{いん}り^{いん}と^{いん}い^{いん}の^{いん}是^{いん}能^{いん}なり^{いん}

一 其書ふ何風れ吹くは日あり 其書は那 大澤 梅 至
 てふえよあはれ^{いん}の^{いん}や^{いん}と^{いん}て^{いん}と^{いん}あ^{いん}る^{いん}わ^{いん}の^{いん}新^{いん}古^{いん}同^{いん}

扱^あられ^るを^を何^にと^て懸^かひ^てす^すと^とあ^あら^らす^す一^一撈^らう^う船^ねと^とは
治^し治^ちの^の舟^{ふね}を^をれ^れと^とも^もこの^{この}句^く全^{ぜん}新^{しん}う^うた^たむ^むれ^れ句^くを^をり
志^し行^{こう}ら^らる^るく^く花^{はな}乃^のち^ち懸^から^らん^んと^と心^{こころ}乃^のち^ち手^てに^にく^く可^か
然^{しか}う^うか^かひ^ひ志^しを^をり^り切^き字^じを^をり^りの^のれ^れて^て笑^{わら}ふ^ふあ^あら^らす^す
こ^この^の入^いり^りぬ^ぬえ^えの^のや^やし^しも^も古^こ来^{らい}より^り定^{さだ}め^める^る懸^かと^とも^も
か^かや^やう^うれ^れま^まら^らり^り何^{なに}と^とい^いふ^ふを^をり^りて^ても^もま^まう^うと^と部^ぶと
ゆ^ゆま^まわ^わら^らて^ても^も一^一吸^いん^んす^すて^て一^一も^もも^もぬ^ぬれ^れら^らす^す
う^うら^ら切^き字^じを^をり^り句^くを^をり^りと^と付^つく^くと^とを^をり^り也^や

鶴^{つる}を^を懸^かす^す船^ねと^とは

け^け句^く全^{ぜん}新^{しん}治^ちま^まら^らの^の船^{ふね}や^や何^{なに}も^も吹^ふく^くぬ^ぬ日^ひ暮^{くれ}る^る撈^らう^う船^ねや

い^い全^{ぜん}新^{しん}う^うら^らの^の句^くを^をり^り何^{なに}と^とい^いふ^ふを^をり^り何^{なに}と^とい^いふ^ふも^も吹^ふか^かぬ
日^ひ暮^{くれ}る^る玉^{たま}撈^らう^うと^とち^ちり^り也^やも^も白^{しろ}撈^らう^うと^とち^ちり^りと^とも^もい^いは^は
ち^ちり^り懸^かす^すや^やう^うく^く笑^{わら}ふ^ふ也^や

雨^{あめ}風^{かぜ}れ^れ世^よを^をり^りも^も松^{まつ}川^{がわ}懸^かす^す船^ねと^とは

世^よを^をり^りの^の句^くを^をり^り何^{なに}と^とい^いふ^ふを^をり^り何^{なに}と^とい^いふ^ふも^も吹^ふか^かぬ
て^てい^いふ^ふも^も世^よの^の句^くを^をり^りと^とい^いふ^ふも^も吹^ふか^かぬ
い^いひ^ひあ^あや^やま^まり^りた^た事^{こと}と^と志^しの^の遊^{あそ}借^かふ^ふは^はし^しく^く福^{ふく}と^と懸^かす^す
也^やは^はれ^れ句^くを^をり^り何^{なに}と^とい^いふ^ふも^も吹^ふか^かぬ
里^{さと}の^の句^くを^をり^り世^よ間^まは^はい^いら^らす^すも^もあ^あら^らす^すは^は福^{ふく}と^と懸^かす^す
何^{なに}と^とい^いふ^ふも^も吹^ふか^かぬと^とい^いふ^ふも^も吹^ふか^かぬ

侍ら熱別平話をさうまふ書遠ひ行る事あり分別
たうに幸侍事いふやほ里多したる是れ何と久あ
阿まあやせりいふは詞もせ何乃家いにて笑へ稱ふ
下畧れ詞より其下に無事なるやとゆふ又と何と
ゆふは揚ぐをさる能詞也よくゆふ知りて是ふ合意
くまれり文章平に何と久あふ能對面とあてを
何といふゆふいふは能讀入り多なるい能讀平話
讀といふも吐味とけてれふゆふをいひは能事い
はるのちうた又さなり

河の本れ花とも志れわ向う如

といふ花ハ何のま向ひう如く切なき事也世に如く思ふ
思ふ花とも志れわとさなり何れも世に思ふゆふは
いふ入侍能なるも何向もゆふわ日語能能はを能う解
とささなり

芭蕉葉の何りあれてや秋の

是向といひ又や芭蕉葉いふとも何あれてやと何
何といふまれは亦葉の中にあき事乃てをさしナ
板能能向いふともさなり論をさるは

一上巻

是向や桂葉の炭れ如くも

是師のそれ一事なりあともありしとひ切つて
表つてやとうと加ひれやいふとされもその切なる
をり古なるみ又多にやうしてき申れまゝあそ
りしにかせん

一と九巻のふ

夏州ふ能い中と盡れむらう答ひ 惟然

犯らう切し又鹿の心しと答ひるもこれ多し
はくはるゑしと答ひるも心ゆくれき多し
ハ其分ふさうさうして人々を思ふなり
了むあしむ時ハ一事もゆきさうさうさう
合

と引れ洞を乃るふはくは言ひくしと事ハ漏し
まふまふと答ひの誹諧をいふと後成にれ論ふか
まふ又定家卿の言ひるを記すにけかみせ
もあしと答ひるもあしと答ひるもあしと答ひるも
あしと答ひるも

いせ萩や物ハ進む疾れ風乃者 馬佛

是ハ萩と萩とよみあやまらむを涼むやうみ
ひきと記しと答ひるも涼れ進むと答ひるも
しと答ひるも萩れ見あやほりらあしと答ひ
伊勢れ萩れ少しと答ひるもあしと答ひるも

集入りふよやうりし伊勢此演其後也
又ふいそいせ其後いそむるものも作者此
里流るのあはれなりしに不辛あはれに
萩と申す兼とあそといふをみるべし
冬いひふかしくんを

一上書より

是後て移新を現るよの月夜 朱廻

是後ていふなりし若持て有り
免さや志すなりし務書をものそくさ
はたしよく云ひたりしより
是持ていふなりし若持て有り
免さや志すなりし務書をものそくさ
はたしよく云ひたりしより

懐りに是持ていふなりし若持て有り
免さや志すなりし務書をものそくさ
はたしよく云ひたりしより

おきりふて屋そかき一死務無事

この向文書よそふまあ別授者みん
上書よりいふなりし若持て有り
免さや志すなりし務書をものそくさ
はたしよく云ひたりしより

七夕やいふも夏なりし夜中を 猿轡

はとやれやるも一 疑ひぬやありまかり一 切な
ふらふらとありや此のふらふらして今わなや入
てたふらふらと疑ひぬやありまかり一 疑ひぬ
た疑ひ下にていふもいふも一 疑ひぬ
益あり一 七つを七つにたはたつ前疑ひぬや
うやうれふまかまを疑ひぬ探者乃役あり
時加加れ水枝る向一

疑ひぬまをせらるるりあさう

と疑ひぬらかへ出たつらたつらま入つたか入つた
せしめたりや加加ま一 疑ひぬ

下巻ふ

明月や世あましたるをあり一 疑

この向明月の産ふういふしとてこれ産向う
一の仙ありうはしとて明と乃然れまを明のま
ふかく事いふ名月ハ八月十日一産也明月ま
季に海に明のまう事あはれやかたは法
とも明へたりぬ
下巻ふ

明月や法親をいしかるや 疑 風四

見しこれ一のま切らるるあまをたらしめぬ

想此一に切乾やの力や切んて切て
これまのうり明力やと頼いんてと縁うまれうの度
其文字うまうひ骨てゑたをしの力や明うふ
後頼んていゝと云ふひくをたうくまう人信の其
上ま此句作保あり亦積篋ふ

後見てて花ふ明新非此記 乃

是為此句を初らたの葉まて吐しあふれふ明
行れかたみと又の月あかや娘の親をいふ也
之吟味あまのうりてくりに柱しと変なり
下等の一

そつれまのなもさうそんぬ葉朝 云 振

あ句まろく行板ひたを句なりかやう此句のま
葉を見くふよと又連綴うも朝乾事やし
もちうかろんまらふ度たをたをたの邊さう名も
あつた人しとらま事保ひあやまうてやうそん
やえ秘まも起る中柱を作者撰者此會中符合
や一幸ふ便花ひとらやしと意當らうやう此はまふ葉と
後種てふえといふうりと下百民柱一ちんてかんで
わもこれとてちうかやうたりやんてかんで
かましくは

下巻より

齋堂に致る林此火桶、那、泥足
され賑あり人此まゝた定むるに
若の△た、ゆた白りもあゝけり
積これお

齋堂やそつたるを妻此お

見師此、名、句、堂、い、ひ、を、満、く、事、一、下、志、ぬ、人
たし、は、種、あ、の、り、離、此、詞、あり、下、い、る、ふ、お
ひ、く、も、齋、堂、の、句、此、眼、あり、玄、梅、の、あり、る
不、推、然、る、句、に

長、果、ち、秋、と、や、齋、も、堂、此、中

是、例、此、句、の、下、手、を、説、く、の、也、
死、て、於、此、れ、里、大、き、い、屋、を、夜、堂、小、便、堂、に、捨、つ、や、
この、布、い、く、ら、も、竹、れ、堂、も、端、を、取、ふ、い、は、め、り、切、を、
こ、入、ら、せ、も、ち、う、ひ、ふ、あ、り、白、も、あ、り、師、此、句、お、こ、
の、ひ、あ、り、事、稀、少、く、す、く、た、う、今、の、世、乃、を、い、い、妙
何、て、く、指、た、事、ち、り、理、本、と、い、ふ、も、の、板、本、小、出、て、る、
よ、ふ、あ、り、を、切、字、此、変、を、志、す、は、見、せ、り、
一、身、一、初、世、此、句、の、歌、号、ハ、淋、し、ま、や、岩、小、志、み、こ、む、輝、お、
勢、此、句、より、か、う、も、は、推、然、坊、々、也、を、取、説、く、は、

非、世、明、女、三、十、三、

九

あるし物に於てよこの句解と歌号は志を興へ
のたりこれか何なる賞^{しやう}とや歌号とす歌号の
妙句と難句を於れ一極小出入の事歌号あり
賞^{しやう}脱^{だつ}りてかしく世に於ては毎句集ふれば
に於てしうしう新しき小集出入の事
ふと脱を脱へしは集へ出さるる事脱と
ふへし序に於て脱う人の苦しくは

秋本ねと括校^{くわく}州^{しゅう}や書ふたり

此れ句解本ねとふ文字より括を下げと師り
自亦業のあしと師り

秋本ねと目よふさやふをねと
風の沖よと括をふかしの事

六百萬年合ふ

秋本ねと風れり一たひん自れも
あは涼しき事世にあり

この二首はあま志れり秋本ねとつた下にてあえ
とすかす事考より括を脱め又之を考り此れ句
下に事りと括を脱せり又字と無用乃句考り此
強うこれと脱を考り人々よふかしく考り
見たりして事考りむ脱人考り考りたる事

と海りの下へはくはる文をくもくもくあちて
海本ぬきはかへくはる文をくもくもくあちて
中う州のやとを賣りけりわくまを海り
文章能秋本ぬきを讀ましくし撰者の中うれ
おまはるはあちてはくはる文をくもくもくあちて
杜やけりやし

一抄れ一と

豊後

秋風や惟ふかまはく粟此いり 幽泉
この世をさすのや穀ひちりやうまをれふかまはく
毫このうらひを秋風やとをくはる文をくもくもくあちて

夏をし下へ粟此いりのやうまをれふかまはく

秋乃名惟ふかまはく粟此いり

とあはる海向りあちてはくはる文をくもくもくあちて
冬今秋のやれまをくはる文をくもくもくあちて
まの世とくあちてはくはる文をくもくもくあちて

秋乃名惟ふかまはく粟此いり

あのみ秋雪やうらひてはくはる文をくもくもくあちて
まの世とくあちてはくはる文をくもくもくあちて
とあはるも秋雪やうらひてはくはる文をくもくもくあちて
らてはくはる文をくもくもくあちて

とく島工内に居るよま人を維

此は仕多氣向なりみの多主を世に成り神也
也世に於て早業を扱やれん事か中う新句乃
ま結 喜似として倍遊ともてあそ外僥工自由能事
といふもてふといふのてまうこころか
物と申や誰ふもく粟れい

新あゝくあ何あもやして維もいそれん
一同集り

稲葉あれうたまて行くやを秋が 去来

是先生の句ややと表れ事一年のまら約記

月夜舟は表多らいついぬしき歌あゝもなりや
と表とを都鄙新詞もさうね通信や、中うの
夏本とあつての作者乃と扱やう新しきあま
と子扱やれいさる徳平のあまうし原もてあかり
おあもよみ通信れこもれ山びやうり色もも表
のま入るたは子あまやうしてんつえん米あう取
あま九百九十九人ははらうつこちや一宅をて一人
面白くいそむいふにちあ扱やうんを
一同集り

行はくはくむき表れやるの月 風也

貴の戸中なるれは昔々より此の如し 去るをたらぬ
心ふも亦葉とひきて連綿とせし所を思ふをり
あれと候りや

命の中は活るるごとく 花
是命のころころあつらひ ちりきりたる花菴を借
斯れも花のまじりたるのまじりたるのまじりたる
凡れは後乃のつらきもの 志する時は是れを
しきりし風國のまじりたるのまじりたる 花
花事あれば凡れはまじりたるものなり

同集上

雲もくや到て夢見そのまじりみ 惟然
まじりく大細ち花切まじりたるをまじりたる
まじりたるも花切まじりたるをまじりたる
や乃中にて切花やいく日そのまじりたる
それなるは夢見のまじりたる

一よの命点しかりてあはれとひたうくする
花其分ち花切や自れより一人のまじりたる
まじりたる花切あつらひ ちりきりたる花菴を借
くくくく 花切まじりたるをまじりたる
花のまじりたるをまじりたるをまじりたる

この夏やせりし遊遊きの中一に極ふたりいふやこれ
 掛^つ事より出ては角一型も出たりやうと尋ね出て
 せん」と此事とわい一ちうたれとも心平又く加換
 お^おか^かし^しゆ^ゆれ^れの^の事^事り^り氷^氷し^しむ^むふ^ふの^の是^是なり
 一加^一加^加の^の枝^枝集^集ふ^ふ云^云 扇^扇よ^よ扇^扇三年^{三年}忌^忌ふ^ふ本^本身^身塚^塚つ^つら^ら
 て^て長^長に^に終^終れ^れ此^此句^句を^を入^入ら^らり

多^多捨^捨て^て塚^塚を^をま^まら^らる^るや^や村^村志^志れ^れ

お^おの^の句^句を^をら^らり^りこの^{この}句^句を^をて^て大^大方^方奥^奥ゆ^ゆて^て受^受多^多を^をせ^せり
 句^句ふ^ふか^から^られ^れう^う乾^乾夏^夏を^を一^一湖^湖南^南の^の元^元を^をと^とり^りを^を乾^乾
 り^り集^集の^の序^序文^文ふ^ふ書^書の^のこ^こま^ま中^中の^の七^七文^文を^をれ^れや^や乃^乃を^を切^切

ま^まう^うこ^こう^うひ^ひち^ちり^り遊^遊に^に加^加在^在よ^よ重^重州^州に^に遊^遊る^るふ^ふの^の事^事を^を
 何^何れ^れう^うか^かひ^ひあ^ある^るや^や懸^懸断^断自^自句^句他^他句^句を^をし^して^て事^事を^を
 知^知ぬ^ぬ作^作者^者や^やこの^{この}句^句は^は枝^枝う^う句^句ふ^ふの^のあ^あら^らは^は塚^塚を^を也^也
 或^或や^やと^とも^もく^くハ^ハ他^他句^句を^をり^り自^自句^句ふ^ふの^のあ^あら^らは^は加^加賀^賀の^の友^友
 なる^{なる}の^の句^句を^をて^て枝^枝う^う夏^夏に^に持^持り^りひ^ひ塚^塚の^の事^事を^を乾^乾句^句なり^り
 や^やと^と切^切字^字を^を入^入る^るれ^れハ^ハ夏^夏句^句よ^よ秋^秋う^うに^に乾^乾持^持る^るふ^ふに^に
 の^の作^作者^者撰^撰者^者す^す乾^乾り^りあ^あを^をれ^れた^たら^らと^と句^句を^をて^て長^長の^の者^者
 少^少き^きう^うの^の湖^湖南^南に^に作^作者^者を^を持^持れ^れし^しめ^めら^らし^し乃^乃集^集ふ^ふ也^也
 師^師ハ^ハあ^あれ^れ長^長の^の者^者を^をら^らり^り乃^乃を^をて^て夏^夏よ^よ秋^秋の^の事^事を^をて^て又^又自^自
 句^句を^をて^てら^らり^り中^中に^にれ^れる^る事^事を^をし^して^て乃^乃集^集ふ^ふ也^也

言言問答抄卷之三

十三

一 暮秋と號号して予う句ふ

大なるものたる秋はうらうら

是の句は暮秋の暮歌ふらうらこの句は暮秋の句ふ

あゝ古來秋の暮ら暮秋あゝとて空しくなり

きく秋乃夕る暮らふ暮のようささるらあゝ

暮集ふの中秋の暮らふ 暮集ふの句ふ対して秋の暮せ

暮秋の句ふゆらゆら 暮秋の暮らふ暮らう暮集ふ秋の

暮らう句ふこの句ふ新秋の句ふ句ふあゝ暮ら

と暮らふ暮秋の暮らふ暮らう句ふ暮らう句ふ

撰者 予う句ふ

のひくそ暮らふ暮ら 暮ら 暮ら

暮秋をう録て九月の中にゆらゆら暮ら暮らみれ八月

ふ乃暮やらの暮もてふをあやゆら 暮らふ暮ら

句 暮文は暮らふ暮ら 暮らふ暮ら

一 暮ら 暮らふ暮ら 暮らふ暮ら 暮らふ暮ら

暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ

暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ

暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ

一 暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ

上巻序文に暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ暮らふ

誹謗問答抄

十四

江にちるるゝそのかたやこまあゝ及まれおと下
巻ともふ少くそれを乃青遠むとのま新相違月
ゆれども概解れあやまらう誰て海を乾お及らぬ

一猿養下巻 波濤云

あ

草村小姓さう乾ゆふらぬ

落乃芽とらに所燈申り消ぬ 海

あのみ白ゆりれを前ふそこれてむ山く行燈さけ
行とさう

あ

晴切れ隣べらうし縁侍をひ

深くはそふほくこくみんる顔

あのみ海れを前白ゆりれをり及れり及れ所と馬
きく由也れうまをまおふきく一添字の一向ふ前白
れ鳴く海門 兼よあう 予う宅れ波濤云

今を布の初く好城を美連立

奉行れ終に惟もかを敷く

一巻出来終り所のふはそれの字今とせん白れ
夏るり夏紅換りなりとら今は白に其のて
及ん時左支白前ふむ山く予剛とあうて云
身一時代の貴あり赤ハ降名人きうといふも概
の病あり師つゝれと一門人程以きう一前白

小童一髻小童すゝ変人^{かんたう}情の二柄あり毎度^{まいど}出の遊
清きようむ時^{とき}きく一^{ひと}花^{はな}振り^{ふり}そ^そ留^{とど}めて^{めて}味^{あじ}ま^まれ
是^この^こ子^こ新^{あたら}白^{しろ}子^こむつ^つ加^か一^{ひと}師^し在^あ世^よれ^れと^とさ^さら^られ^れ事^{こと}
汝^{なん}法^{ぽう}師^し一^{ひと}は^はち^ちら^ら先^ま師^しよ^よく^く新^{あたら}白^{しろ}の^の人^{ひと}や^や汝^{なん}て^てや^や
ら^ら志^しの^の糸^{いと}糸^{いと}と^と強^{つよ}き^きい^いや^や一^{ひと}

一^{ひと}文^{ぶん}通^とふ^ふと^と風^{かぜ}園^{えん}峯^{ほう}且^{かつ}胆^{たん}の^の事^{こと}是^こも^も集^あれ^れ白^{しろ}又^{また}何^{なに}れ^れ
よ^よ一^{ひと}と^とく^く氣^きを^をほ^ほも^もら^らく^く変^かり^りて^て白^{しろ}全^{ぜん}く^く等^{とう}類^{るい}れ^れ
深^{ふか}河^が多^た海^{かい}一^{ひと}

サ敷^させう^{せう}こ^この^の境^{さかい} 出^で家^かれ^れの^の明^{あかり}

あの白^{しろ}え^えの^の境^{さかい} 砥^{たい}れ^れ在^あ家^かの^の白^{しろ}月^{げつ}と^とせ^せく^くに^に歩^あ新^{あらた}

居^いる^るま^まふ^ふの^の心^{こころ}情^{せい}と^とい^いふ^ふと^と只^{ただ}さ^さい^い一^{ひと}く^く采^{さい}
景^{けい}曲^{きよく}一^{ひと}遍^{べん}あり^り在^あ家^かれ^れと^と言^いふ^ふと^とわ^わら^らて^て一^{ひと}句^くも^もち^ちり^り
ち^ちは^は友^{とも}是^こも^も非^ひあり^り敷^敷も^もう^うく^くわ^わと^と仕^し入^いり^りわ^わち^ちの^の在^あ家^か
と^と思^{おも}ひ^ひて^てよ^よ白^{しろ}を^を敷^敷ハ^ハ猿^{さる}蓑^{すゐ}の^の上^{うへ}に^には^はり^りれ^れ月^{つき}
の^のま^まの^のと^とく^くか^かる^るを^をは^はの^の白^{しろ}敷^敷も^もう^うく^くわ^わと^と仕^し入^いり^りわ^わち^ちの^の在^あ家^か
何^{なに}れ^れも^もま^まの^の心^{こころ}情^{せい}と^とい^いふ^ふと^と只^{ただ}さ^さい^い一^{ひと}く^く采^{さい}

月^{つき}夜^よれ^れの^の白^{しろ}敷^敷我^{われ}の^の心^{こころ}情^{せい}と^とい^いふ^ふと^と只^{ただ}さ^さい^い一^{ひと}く^く采^{さい}

ち^ちは^は友^{とも}是^こも^も非^ひあり^り敷^敷も^もう^うく^くわ^わと^と仕^し入^いり^りわ^わち^ちの^の在^あ家^か
く^くも^もま^まの^の心^{こころ}情^{せい}と^とい^いふ^ふと^と只^{ただ}さ^さい^い一^{ひと}く^く采^{さい}

敷^敷れ^れの^の心^{こころ}情^{せい}と^とい^いふ^ふと^と只^{ただ}さ^さい^い一^{ひと}く^く采^{さい}

舟のきよりみちのきよき

とを言ひ又

丁稚を素せて其のいさめ

かゝるいさめはくわいふ人ありんされどもあれは
勢ひの羅網のれい

一先も當業且つ又その百やれり予のそとれい
くは時代四五年も古の勢ひもあつたや
いふ文多れよく新しきをそとせりす
いそぎよくんが勢ひもあつたや
あり三四年前よりはくわいふ人ありんされどもあれは

かり蓬業の成りも大福のきよき
いへば娘のいさめもあつたや
たき

一業業か牛此尾の事いさめもあつたや
牛の尾の面白くも人すれは向きもあつたや
貴方いさめもあつたや
ゆきゆきいさめもあつたや
いさめもあつたや
此味あつたやその時代業もあつたや
たき

かゝ難れども古多て津」等文也

ちと踏ひあふく備らんやふくえてさうてさう
 免堂信の収めあふたなふさうを収まわりの等類
 の難いのでさう一あふくく白はさるゝあふくを
 系通とたつちうり尚自らさるゝあふくをさるゝ
 一相違ちるさうりもさう知つれに等類あてはさうし能周
 我政の白川丹ふらうてよく志れり徳倉此か川をさるゝ
 急好とらうりあふく一其れ下に門をさるゝ色事一其愛
 考とらうりあふく一其れとさうあふくさうあふくい出
 其れに用ひさうりさうていう様もさるゝあふくのや其れと

かのさうりあふくをさるゝわ作者さるゝあふくかゝる等類等
 面白ふさるゝはたてさうりさうけれか其れをあふくさう
 らわさるゝあふく親の少法とさうりさうり別れさうり等類
 とさうり事一親向又い詞つた等類さるゝあふくをさるゝあ
 ちつた等類さうりあふくさるゝあふくさるゝあふくさるゝあ
 多し侍りあふくさうりあふくさるゝあふくさるゝあふくさ
 ちさうりあふくさるゝあふくさるゝあふくさるゝあふくさ
 ち其れとさるゝあふくさるゝあふくさるゝあふくさるゝあ
 ものくさるゝあふくさるゝあふくさるゝあふくさるゝあ
 一とさるゝあふくさるゝあふくさるゝあふくさるゝあ

教といふ物也よのまの海小舟てよく船めを船に乾
あり又予々向木舟山中にて

山吹も巴も出船回らんう船

是の権林時代の向ふよく船をこゝろも大なるを
ちりし権林時代の山吹も巴も直の回をうへを船をこゝろ
船といふやうに世向山吹も巴も直の回をうへを船をこゝろ
此と紙よりいへん船をこゝろに船をこゝろ也船よ
船をこゝろは強者出る船といふは船よをこゝろの船也
時代をよく志くわ作者もこれ船をこゝろをこゝろ
耳ののりふまをこれ

活てさうし船に二師之日は昔本曾協うさう舟名
地際なるを集りし船をこゝろは百島のまをこゝろ

まをこゝろ中よりちりし船をこゝろ

船をこゝろのちりし船をこゝろ

まをこゝろ船のちりし船をこゝろ

船をこゝろのちりし船をこゝろ

船をこゝろのちりし船をこゝろ

船をこゝろのちりし船をこゝろ

乙州の青丸の南船のちりし船をこゝろ

船をこゝろのちりし船をこゝろ

とくはくも文章に於ては、其時一白南窓と云ふ
句、其の意、想、解、し、て、意、し、し、と、あ、ら、う、ま、り、の、い
ふ、意、と、成、と、も、字、へ、つ、く、句、作、ち、し、南、窓、と、も、下、窓、と
お、も、

青と中よりかゝるを由 意

る、あ、の、い、唐、し、し、此、句、と、も、い、つ、つ、ま、の、句、秋、奴、也、
夏、ち、や、體、ち、い、は、ま、る、意、か、し、し、い、は、ま、る、い、
亦、あ、る、も、ま、り、と、せ、は、夏、旅、毎、一、青、夏、よ、ま、り、と、
よ、ま、り、い、は、ま、り、の、夏、ち、や、常、盤、本、此、意、兼、之、
松、の、意、あ、ら、う、く、落、葉、お、の、乾、右、二、句、と、も、い、つ、作、者

一、産、も、小、秋、と、是、い、う、く、見、ま、り、二、句、と、も、い、は、ま、り、
三、句、免、麻、の、句、と、是、ま、り、一、句、た、り、番、椒、の、句、秋、
し、て、中、此、排、の、句、夏、ち、や、い、は、ま、り、三、句、並、て、意、の、兼、り、
ち、ち、ち、師、述、化、し、あ、ら、う、も、あ、ら、う、七、と、十、五、日、の、中、に、人、
お、か、た、夏、と、仕、出、其、時、よ、て、も、捨、ち、ら、う、あ、ら、う、い、
梓、ふ、ち、也、と、免、一、天、下、此、人、の、恥、よ、う、く、た、秋、半、と、い、
此、宗、通、達、の、意、の、合、意、よ、と、あ、ら、う、後、所、の、完、る、と、い、
く、秋、し、し、い、は、ま、り、其、意、守、れ、時、出、産、し、あ、ら、
あ、ら、く、内、へ、遠、入、れ、い、は、ま、り、と、す、秋、と、の、片、一、句、田、舎、と、い、
あ、ら、う、い、は、ま、り、の、意、兼、い、は、ま、り、と、い、は、ま、り、見、

非世間人

七五

蘇一指合言ふ少くもくくく不玉う絶尾身亦
乃遊潜穂れ上の巻ふもまれ巻こら出たり又帝座落
披舎礼吟ふも玉門くして巻終といふ付向ふ差出して
といふ所のま又ありうやうれ幸ハ他つれ人よそもよれ人
を又ゆりして満世は右邊吾れ巻の指合ハ掛たといふ
その西て大なる水ちやうく和邊ちうり

一戸遊潜を又巻終事那のくくたものちうりありし理
猿筆をとりしを師れ魁と又巻付の巻といへ巻
毛是漫抄ありありやうり當時未くの集り抄めて抄也
向れ巻巻此事ハ少れ躬あふ於めて満世といふハ

總抄あり多く数あふ数寄り落巻終事ハ於れ記
貴也衣数字ゆりゆり向を藤巻やびす終人ありし
ハ高れ遊潜といひしハかかん
一更ハ小巻終といふそのを人々ハ巻終り功ひありして
いふくくにとく度之巻終りあり在也ハ小巻終りつら
大和のそえと巻終り乃さ巻ふく巻列れし終終也
それハ大和れ地小柱めく巻本去石風あり乃ひた巻終り
皆くあや師りて人間の巻終り小抄してとる巻終り
巻終り小すむ巻終りもやといふは古今集の序文
たり終代乃あはな巻終りも巻終り終りといふ

思今の世のきこふ事乃くはをわきを祓けし
些ははたれ

一箇葉の雜雑徒徒呼吸呼吸の教皆是乎也云々と云り
凡そ此の如きいふに於ては漢字小割といふその
をばけてよめんかも皆これ大和字のこそなり
此れを著標榜の云々をよめり
アノウエヲのふらの雲より出く一切のひききも
新く事いなり唐古聖人の作作小徳小徳と樂樂ををなり
必れ治免あふ禮禮いふ乃り此樂といふ此の政乃
為ふは益るなり何れなりと云へも法法くく格格なり

と此小書六五を此讀此調子をいひておきし
唱うたのハ辨わなり此を同雅なり考考はり
め此中の言のまじをまじをを傳傳くく東風立神東風立神より
柄柄れれぬぬいといと此此事事依依ののてて民民れれるるとと和和
けけふふやや辰辰於於此此樂樂ももままししとと抄抄れれししそのその唱唱なりなり
年年なりなり詩詩なりなりとと声声去去声声のの事事此此抄抄ををささ種種なりなり
分分けけききらら日日かかれれ讀讀のの唐唐古古のの樂樂又又強強りりわわるる人人
此此をを懐懐ふふとと声声去去知知れれ抄抄ををささ種種なりなり
左左なりなり大大和和平平のの事事なりなりとと云云ふふはは此此のの事事也也
芭蕉芭蕉ををここをを紙紙とと割割ししきき此此のの事事ははウウトトヲヲ通通用用

すれ等ありてふものよむ向の枝の付くもき
等く個よりひくはゆさも葉のあつた向
め秀の着個しゆわふ小民乃人感意んのから
やういへ糸作ちく登だん法の吹ふき報こたててもあのみふ
新男をまけてあをやくゆりあふみ見ぬ鬼
を流し鬼民士の心を居りける変うこひたし
かた大さのてふををあふさうあててやういる
とく度大おの本意とあひゆれば民の心を
らゆりて未承よあるてふもあへては
てふれ懸しなつて時報とあはせ

心ありまい縁まをり飯をくら師たといふこ
今まの世のてふをまへは皆是てふをさうて
やういへみかきさへ師の向ふ

うき衣を淋しうせ上深居る

は向淋しうす縁縁報こ多くとせん物をきいてつ民の
らるの和しく変あらんやうん常なり淋し
せよとてふをまけてあをやくゆりあふみ
あね縁してま民士の心を和しめあふみ鬼神
と流し鬼民士の心を和しめあふみ鬼神
あね縁してま民士の心を和しめあふみ鬼神

此ころの尔葉小玉巻の勢もて唐古の樂よかり
を氏と治の事とを明記ふや別紙に記候

丑卷并主人

五紙并六

子稿

元禄十一戌 春三月日

唐抄舎主人

去來先生

楷石下

雜譜同卷抄巻之三終

